



『源氏物語』における、明石物語の展望をめぐって

松本，瑞貴

(Degree)

博士（文学）

(Date of Degree)

2023-03-25

(Date of Publication)

2024-03-01

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第8516号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482264>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文内容の要旨

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

『源氏物語』における、明石物語の展望をめぐって

氏 名 : 松本 瑞貴

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程文化構造専攻

指導教員氏名 (主) 樋口 大祐 教授
(副) 石山 裕慈 准教授
(副) 古市 晃 教授

(注) 4, 000字程度 (日本語による)。必ずページを付けること。

本論文は『源氏物語』における明石一族繁栄の物語（以下、明石物語）がどのように構想されているかを検討し、物語全体の展開にどの程度影響を与えているかについての究明を試みたものである。本稿は、序章及び終章と第一～五章から成り、以下に各章の要旨を記していく。

第一章「二世源氏の物語」

明石物語と関わりの深い光源氏・夕霧親子による源氏二代に渡る繁栄の物語について、その繁栄への過程の分析を行っている。源氏繁栄の道程を分析することを通じて、明石一族が源氏の繁栄に果たした役割を考え、源氏・夕霧親子の繁栄物語と明石物語の密接な関係を確認した。

史上、物語成立以前に二世の源氏が大臣に昇った例は無く、これは藤氏の娘達が後宮を独占し、代々天皇外戚の地位を締め続けたことが要因として考えられる。

この困難を乗り越える為、源氏はまず養女秋好を入内させ、絵合巻では頭中将を押さえて後宮を席卷する。続いて明石姫君を東宮に入内させ、姫君の皇子出産を経て将来の天皇外戚の立場を盤石にした。

また、物語内には皇族との姻戚関係を重視する思想が見受けられ、源氏は女三宮、夕霧は柏木の未亡人女二宮を妻としている。更に源氏の養女玉鬘と髭黒大将や、夕霧と頭中将の娘、雲居雁の婚姻によって、臣下同士の紐帯を保つことにも成功する。源氏は史実における藤氏の方法に則って、天皇外戚の地位、皇女との婚姻、臣下との婚姻による紐帯を全て整え、夕霧もまた同じやり方で権力を固めている。この源氏の繁栄を下支えする一番重要な後宮政策には、明石一族の存在が不可欠で、明石物語は源氏繁栄と一体となって進行していく。

そしてまた、源氏の執政者としての特徴は「大殿」という呼称によく表れている。「大殿」は「摂関の父親」と「天皇の外戚」という側面から特徴付けられる道長以降の摂関家特有の呼称である。物語は桐壺朝左大臣と源氏、源氏と頭中将という婚姻を通じた擬制的関係にこの制度を転用し、源氏の執政者としての能力の欠如を補った。同時に夕霧に実務能力を身につけさせるため大学に入れ、この教育方針が大学と文治政治の復権をもたらす。現在まで、夕霧の大学入学は理想政治の実現という側面から論じられてきたが、本稿はむしろ文治政治の復権は副次的位置にあり、源氏の主目的は夕霧への善い権力委譲を見据えた、実務能力の補完にあったと結論付けた。

第二章「家再興の物語としての明石物語 一藤原高藤・山蔭説話との関連から一」

明石物語について、その構想に影響を与えたと思われる、歴史上実際にあった二つの家繁栄の説話との関係を中心に考察している。

まず明石物語が、藤原高藤と山城郡司宮道弥益女、烈子との婚姻譚、所謂勸修寺説話とその展開において多くの共通点をもつ事を確認した。

また、明石物語は明石の君から二人の娘である姫君、そして姫君の出産した若君へというように、女系による継承という特殊な論理で家の繁栄を成しているが、ここに山蔭の説話の影響が見受けられる。明石物語は没落貴族の娘と貴顕が婚姻することで一族が浮上する物語であり、その論理は『大鏡』に表れる山蔭の「宣誓」に近い。

結論として、明石物語はその全体の展開を勧修寺説話によりつつ、再興の論理としては山蔭説話を元としていると言える。また高藤・山蔭説話に共通する、「神」の介在によって不可能を実現するという要素を引き継ぎ、明石物語においては住吉神がその役割を果たしていることを指摘した。

第三章「明石物語の構想」

二章にあげた二つの説話の内、何故高藤ではなく山蔭型の論理が物語において採用されたのかについての考察を行っている。

高藤型の論理によって一族の再興を遂げようとした明石一族の同族、按察使大納言の計画は、史上の立后・立太子事情から乖離しすぎていたために頓挫せざるを得なかった。明石物語は、この按察使大納言の挫折を踏まえて、より当時の実情に即した形で一族の浮上を成し遂げるため、天皇に直接入内という道を選ばず、明石の君と源氏の婚姻から始発していると考えられる。

貴顕と領階層出身者の娘の婚姻は、物語成立の比較的直近まで実際に存在した事例であり、明石物語は、藤原山蔭や高階成忠などの事蹟を元に、野心的な受領層の再興を賭けた物語として展開されている。

また明石一族は、光源氏との関わりのなかで源氏側の要請によってその価値を見いだされ、無謀にも思われた物語を達成しているが、彼らの悲願達成の為には、源氏が臣下である必要があったということを確認した。明石物語は、源氏が臣籍降下したことによって初めて始動し、源氏もまた自らの繁栄の為に明石一族を必要とする。このような点において明石物語と源氏繁栄の物語は、どちらが欠けても成立しない、第一部・第二部を通じて常に同時に進行した物語であると言える。

第四章「女君達の物語 ―明石の君と紫上を中心に―」

明石物語や源氏・夕霧親子の繁栄物語一応の達成を見た後、これらの物語に代わる形で展開されていく、女君達の苦悩の物語について検討している。

『源氏物語』や『更科日記』には、物語の登場人物と自らを重ねて物語を楽しむ女君の姿が表れている。物語の享受には女性達が世界を学び、自身のロールモデルを模索するという面がある。その為に物語は多様な女君の人生を展開していったのではないかと想定し、その中心人物として紫上と明石の君が存在すると考えた。二人の造形を「家」・「子」・「婚姻」という三つの側面から分析し、彼女達の各要素は源氏の栄華の為に形作られて、互いに欠如する要素を補い合っていると結論を出した。源氏と人生を

同じくするという事は、彼の政治的進退も同じく経験するという事である。それ故二人の女君は、源氏との結婚に起因する様々な問題から離れて人生を歩む事が不可能であり、多くの苦しみを得た。

物語は、貴顕との婚姻が女君の人生にもたらす苦しみをリアルに抉りだしている。第二部までの世界は、明石一族や源氏父子の繁栄を描きながらも、その影で犠牲となり続けた明石の君と紫上の人生や、それぞれの述懐を通じて、女君を取り巻く様々な困難を照射し、「女は如何に生きるべきか」という問いを、解決を見ないまま第三部世界へ遺している。

第五章「宇治十帖の女君」

第五章では、第三部世界における宇治八の宮の三姉妹の人生を通して、「女の生き様の物語」がどのような結末を迎えたのか、また、彼女たちの人生に、明石一族や夕霧の繁栄の物語の余波を読み取ることが出来るかを考えている。第三部世界は、八の宮の三人の娘を通して第二部が投げかけた「女は如何にして生きるべきか」という問題を描いている。三姉妹は皇族の血をひく女君達の物語として展開するが、皇女の人生が物語のテーマとして語られやすい背景に、「後見」のない女君の人生は本来皇女が貫くべき独身主義という理想を著しく難しくしてしまう、という事情が想定される。

大君は、自らや妹・中君の婚姻問題を経験していく中で、紫上と同じく結婚への不信を抱き、その死をもって結婚拒否の意思を通した。中君は今上帝の第三皇子匂宮と結婚し、宮の第一子を出産する。彼女は明石の君と同じように、子を成すことで平穏を得たように見える。しかし、苦しみながらも一族に奉仕し、最後に繁栄を達成する明石の君とは違い、その結婚生活は匂宮の好色に加え、匂宮が夕霧の娘・六の君を妻としており、中君自身には家族の「後見」も無く、自らに好意を寄せる薫を「後見」とするしかないという点において、非常に不安定である。この二人の妹である浮舟は、大君の「形代」として登場する。彼女は、苦難の果てに物語内で初めて男君の許し無しに出家を遂げ、前途に多くの不安を抱えながらも、主体的生を通そうとする女君である。

宇治の三姉妹達は、はかばかしい「後見」がないために、結婚を巡る問題に対して、後ろ盾の確かな女君と比べ、弱い立場におかれていたことがその不幸の主たる要因であるという点で一致している。彼女達の苦難の背後には、夕霧や明石中宮、薫による権勢を巡る問題が隠されている。京に生きる薫や匂宮と関わりを持つことで、彼女達は婚姻に起因する問題に巻き込まれていくことを確認した。

第二部世界において既に達成され、第三部ではわずかにその繁栄が描かれているだけにみえる夕霧や明石一族の物語は依然として物語の根底に潜んでおり、女君の人生に影響を与え続けていると言えるだろう。この点において、第一部・二部を牽引した政治的諸物語とこれに代わる形で登場した女君達の物語は、表裏をなす問題であるという結論を得た。

論文審査の結果の要旨

氏 名	松本 瑞貴
論 文 題 目	『源氏物語』における、明石物語の展望をめぐって
要 旨	
本論文は、『源氏物語』における明石一族繁栄の物語の構想の諸特徴、および物語全体に対する影響の深度について探求したものである。序章、終章、および第一～五章から構成されている。 第一章ではまず、論全体の導入として、光源氏・夕霧親子の繁栄に至るプロセスについて分析し、そのなかで明石一族が果たした役割、明石物語の重要性を確認している。『源氏物語』成立以前の時代、二世源氏が大臣に昇進した例はない。これは藤原氏の娘たちが後宮を独占し、代々天皇外戚の地位を占め続けたことが要因である。物語ではこの障礙を克服するため、光源氏は実子明石姫君を入内させ、その皇子出産により、将来の天皇外戚の立場を勝ち取ったとする。また、本章では物語内に、皇族との姻戚関係を重視する価値観が示されているとし、光源氏と女三宮の婚姻等を例示している。光源氏は史実における藤原氏の方法を模倣し、天皇外戚の地位、皇女との婚姻による姻戚ネットワークを整え、権力を確立したが、この手法を下支えする核心部分に明石一族が存在していることを指摘している。 また、第一章では、源氏の執政者としての特徴が(本来は「摂関の父親」にして「天皇の外戚」である存在に対して使用される)「大殿」という呼称によく表れていることを事例を通して指摘した。さらに、光源氏が夕霧に実務能力をつけさせるために大学に入れたことが、大学と文治政治の復権をもたらしたが、その復権は副次的なものに過ぎず、光源氏の主目的は夕霧への権力移譲を見据えた、実務能力の養成にあった、と指摘している。 本章の叙述は研究史の上で特に新見を示したものとは言えないが、全体の論旨を展開するうえで必要な序論にあたる部分であるとみなすことができる。 第二章では、明石一族の物語の構想に影響を与えたと思われる二つの説話(勸修寺説話と藤原山陰説話)との関係について考察している。まず、光源氏と明石の君の出会いの物語は、藤原高藤と山城郡司宮道弥益女との邂逅譚との共通点が多い。しかし他方、明石の君から明石の姫君、そして姫君が出産した若君へと続く女系による没落貴族の再興譚としての枠組みは、『大鏡』の山陰説話に近い。また、明石物語は「神」の介在によって不可能を実現するという論理を二説話より引き継いでいると思しく、具体的には住吉神がその役割を果たしていることを指摘した。 本章においては、『源氏物語』の著者が勸修寺説話と藤原山陰説話、特に後者を意識的に物語の構想に取り込んでいるとの論旨が示されている。前者に関しては疑問が残るものの、後者の論旨は妥当であると考えられる。 第三章では、明石一族の物語が最終的に高藤型ではなく山陰型を採用していることと理由と背景について探求している。まず、高藤型の「娘の後宮への入内による家の再興」というパターンは、明石一族の同族である按察使大納言によってかつて目指されたことがあったが、すでに同時代の立后・立太子の慣例からあまりにも乖離してしまっていたために実現しなかった、と論じている。対照的に、明石の入道は貴顕と受領層の娘の婚姻を出発点とすることで家の再興を目指したが、これは藤原山陰のみならず高階成忠の事例にみられるように、10世紀後半の時点でも存在していた。	
主査記載 氏名(自署)	樋口 大祐

そしてそれは、臣籍に降下した光源氏にとっても、その権力掌握のためには必要な選択肢であり、その意味で光源氏と明石一族は利害の一致する関係であったことを指摘している。

本章はすでに活字化している部分でもあり、本博士論文の中心的な部分であり、山蔭説話に関する分析は一定程度評価できると考えられる。

第四章では、第三章までとは異なり、以上のような政略の道具となった明石の君、そして紫の上等、当時の女性たちの苦悩について考察している。まず、『源氏物語』には『更級日記』の読者のように自身のロールモデルを物語中の女君に求める傾向にこたえるために多様な女君の人生を展開していった面があることを想定、その中心人物として紫の上と明石の君が存在することを指摘した。そして、この二人が「家」「子」「婚姻」という、光源氏が栄華に到達するための三条件を互いに補い合って達成していることを指摘、そしてまさにそれゆえに彼女たちの人生は光源氏と離れては展開しえず、そこに二人の苦悩が胚胎する結果となったさまを考察した。そして、貴顕との婚姻が彼女等の苦しみの源泉であることを踏まえ、「女は如何に生きるべきか」という問いが解決を見ないままに、第三部世界に持ち越されている状況を考察した。

本章は第三章までが物語内の人間関係の分析を中心としたものであったのに比べ、光源氏の婚姻関係の当事者である女性たちの苦悩に焦点化した論であり、研究史上の新しい意見とはいいいがたい面もあるが、叙述にかなりの熱量と説得力を示している部分といえる。

第五章では、如上の命題を引き受ける形で、宇治の三姉妹の人生が描かれていることを踏まえつつ、彼女たちの人生に明石一族や夕霧の繁栄の物語の余波を読み取ることを目指している。

まず、三姉妹は皇族の血を引いているにもかかわらず、しっかりした後見がないために、皇女の生き方の理想とされていた独身主義を貫くことが難しい状況に陥っている（そのように設定されている）ことが指摘された。また、彼女たちの苦難の背後には、夕霧や明石中宮、薫の「権勢」をめぐる問題が隠されており、彼女等は都世界で生きる薫や匂宮と関わりを持つことで婚姻に起因する問題に巻き込まれていく構図になっていることを指摘した。その意味で、明石一族の物語は、第三部において、宇治の三姉妹の不幸の遠因をなす役割を担っており、明石一族の物語と宇治三姉妹の物語は表裏の関係にある、との結論に至っている。

この「表裏の関係」という把握の仕方は、第三部世界の読みとしてより深く展開しうる可能性をはらんでおり、今後の研究の深化が期待される形で終わっているといえる。

以上、本博士論文は、当初は明石一族という没落貴族の家が、いかにしてその再興を実現したかという問題にフォーカスすることから出発したものであった。しかしながら、研究を進める過程で、家の再興物語の背景に隠された、当事者である女性たちの苦悩に論点が拡大され、さらに第三部世界においては明石一族の「成功」が別の没落皇族の「幸福」を妨げる要素として機能するという逆説的な状況が生まれていることをも見極めるまでに至っている。その意味で、最終的に、博士学位論文として、十分な深度を獲得したものになっていると判断できる。

審査委員

区 分	職 名	氏 名 (自 署)	区 分	職 名	氏 名 (自 署)
主 査	教授	樋口 大祐	副 査	教授	古市 晃
副 査	准教授	石山 裕慈	副 査	助教	有澤 知世
副 査	准教授	村 新			